

第8回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「当たり前のこと」

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 1年 石川茉耶



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『当たり前のこと』

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 一年 石川茉耶

カキ氷が食べたい。

こんな暑い日に、クーラーもないこの部屋で夏休みの宿題なんてやつてられない。まあ、明日学校なのにもかかわらず、算数の問題集だけ残しておいたのがいけないんだけど。あーあ。

ぶつぶつと文句をつぶやきながら、芽衣は小さなため息をついた。今家にはだれもいない。出ようと思えば部屋から出られるし、エアコンのあるリビングでこつそりカキ氷を食べても多分ばれないだろう。でも、言いつけを守らなかつた事が判明した後のことと思うと、恐怖で何もする気がなくなる。それくらい芽衣にとつて母親は絶対だつた。母親が買い物に出かけてから、やけに静かだ。さつきまで鳴いていたセミたちも、一斉に鳴きやんだので、部屋の温度がさらに上がつたような気がした。ふと、学校の事が頭をよぎつた。後少しで新学期。また皆に会える。そう考えるだけで、芽衣は興奮を抑えられなかつた。無意識に目の前にある鏡を手に取り、自分の笑顔をみつめた。

うん。

やつぱりかわいいな。

なんて思つていると、宿題の事などすっかり忘れ、学校の事を思い出していた。きっと芽衣が教室に入ったとたん、大勢の「おはよう、芽衣」が聞こえるのだろう。それから色々な人の夏休みの話が芽衣の耳にとびこんでくる。だつて芽衣は笑顔の中心にいる人なのだから。当たり前のこと。だからといってクラスの子全員と話をしたり、遊んだりするわけでもない。



仲が良いといわれている四年一組にでさえ、いじめはあった。これも当たり前のこと。

沙良は絶対誰とも話さない。というより、話させてもらえないといった方が正しいだろう。皆沙良は「いないもの」だと思っている。机は汚い。教科書もない。ノートは破れている。そんな日常の中沙良は生きていた。

沙良かわいそうだよなー。でも、芽衣が助けたらきっと芽衣もいじめられる。そんなのは、絶対嫌。昔は仲良かつたけど、あれだけいじめられていの子が幼馴染だなんて誰にも知られたくないし。せっかくクラスの中心になれたんだもん。わざわざ助けたりなんかしない方が自分のためだよね。そう自分に言い聞かせながら、鉛筆を手に取り、足し算の問題を解き始めた。そう、沙良の事なんて忘れて…

めずらしく芽衣は集中していた。二十問くらいは解いたはずだ。静かな部屋の中、風の音だけが聞こえていた。

はずだった。

はずだったのに。

誰だろう、あの人は。何でずっとこっちを見ているのだろう。何であの人は家の外にいるのに、声がはつきり聞こえるのだろう。全身の汗がひいた。鳥肌がたつた。夏なのに、芽衣はこれ以上ないくらい寒かつた。あの人は言つた。

「芽衣、気をつけてね。芽衣なら、どんなことがあっても大丈夫なはずだよね。きっとそうだよね。芽衣なら変われるよね。」

まるで独り言のように、ぼそぼそと言つた。顔を隠していたので、誰だかよくわからなかつた。だけど芽衣には見覚えがあつた。あの人が着ているワンピース。あれは…沙良が着ていたものだ。仲が良かつたときに良く自慢していたお気に入りのワンピース。

なんだ、あんな怖い顔して。沙良じやん。



賢治のまちから 高校生☆奮闘大賞

もう、幼馴染だからってやめてよ。

もし、芽衣の家に沙良が来たことがクラスの皆さんに知れ渡つたら、きっといじめられるだろう。それしか頭になかった芽衣は沙良から視線をずらして大声で叫んだ。

「ちょっと沙良。もう遊びにこないでよ。いくら前仲が良かつたからって、あんた今はいじめられてるじゃん。そんな子と芽衣が遊んでるって知られたら、芽衣だつてあんたみたいになっちゃうの。」

風が吹いた。さらさらと木の葉を揺らした。それと同時に、感じていた視線がなくなつたので、横目で窓を見ると、立つていた人影がなくなつていた。芽衣はしばらく窓から目が離せなかつた。いつの間にか夕方になつていて、空が赤色に染まつていた。新学期まで後少し…。

いつものように早起きをした芽衣は、以前クラスの皆さんにほめられたことのあるスカートをはいていた。母親が作ってくれたオムライスを口にし、ランドセルをもつて学校に行つた。久しぶりにどきどきしていた。

四年一組の前で深呼吸をし、勢い良く扉を開けて、「おっはよー」と叫んだ。クラスの空気が違つた。芽衣が入つてきたから、というより最初から何かあつたようだ。

席に着いた芽衣は、親友のミドリに小声で事情を聞いた。ミドリは静かに答えた。

「沙良ちゃん。今まで自分がいじめられていても、何にも言わなかつたでしょ。だから誰も気にしてなかつたんだけど…。」

ミドリは沙良の席を見つめていた。

「飛び降りたんだつて。夏休みが始まる直前に学校の屋上から。」

芽衣の笑顔が消えた。ミドリが何を言つているのかいまいちわからなかつたし、だいたい夏休み前に飛び降りたのなら、昨日のあの人は誰だつたのか。



賀治のまちから 高校生☆童話大賞

周囲の目などきにせず、芽衣はミドリに叫ぶように言った。

「沙良はどうなの。死んじゃったの。ねえ、どうなの？ ミドリ…。やっぱりいじめなんて良くなかったんだよ。」ミドリがそうだね、と言つてくれることを期待して、芽衣はミドリの手を握つた。しかし、期待していた答えではなく、ミドリはただ「芽衣ちゃん、そんなこと言つちゃだめだよ。皆に聞こえちゃうよ。芽衣ちゃん…。」

と泣きそうに言うだけだった。

次の日。昨日のミドリの言動が気になつたけれども、たいしたことではないだろうと自分にいいきかせて、母親が作つてくれたオムライスを口にし学校へとむかつた。四年一組の前で深呼吸。いつも必ずやる事。そして勢い良く扉を開けて「おつはよー」と叫んだ。

クラスの空気が違つた。いつものように明るくない。でも昨日とも違う。最初から何かあつたからではなく、芽衣が入ってきた瞬間に重くなつたみたいだ。

え…。何かあつたのかなあ。芽衣、昨日皆を怒らせるようなことしてないしな。とりあえず、ミドリに事情をきいてみよつと。

そう思つた芽衣は、自分の席に着いて、隣に座つているミドリに話しかけた。「ねえ、ミドリ。沙良のこと以外で何かあつたの。」いつもなら、「おはよう芽衣ちゃん」と誰よりも先に笑いかけてくれるミドリだつたが、この日は芽衣の方を見向きもしなかつた。はいていたズボンをぎゅっと握り締めて、下をむいていた。

まつたく。なんなのよ。ミドリ昨日からなんか変なんだよね。まあ、いいや。違う子と話そう。

芽衣はいつも一緒に遊んでいる女の子グループに笑顔で駆け寄つた。

「皆おつはよー。今日から授業だよねー。」さつきまでわいわい騒ぎながら楽しんでいた女の子たちだつたが、一斉に話をやめた。そしてそのグル

ープのリーダーらしき子が皆を代表してこう言つた。

「今なんか言つた？」

「えー。私にも聞こえなかつたよー。」

と誰かが笑いながら答えた。

「ちょっとまつてよ。冗談？ 新しい遊び？ 幽霊ごっこで芽衣が鬼になつちやつたの。」

わけがわからぬまま、芽衣はリーダーの女の子の肩をポンっと叩いた。「キヤッ。何かが私を触つたー。幽霊だ幽霊。こわーい。」

女の子たちは走り回り、教室を出て行つた。一瞬芽衣は現実を受け入れたくなかったが、そんなことを考えている場合ではない。早く自分の身を守らなくては。

「沙良の次は芽衣なんだ。女子もよくやるよなあ。」

「じゃあ、助けてやれば。お前、芽衣と仲良かつたじやん。」

「嫌だよ、かかわりたくない。それよりサッカーしに行こうぜ。まだ時間あるし。」

男子の話声が芽衣の耳の奥まで響いた。

「ああ、そうか。昨日大声で言つちやつたんだ。イジメナンテヨクナカッタンダヨ。」

たつた一言だつたのに。だからミドリは芽衣に話しかけなかつたんだ。助けたら次は自分だから…。

その後は今まで経験したことのないくらい苦しい一日になつた。教科書がなくなつていた。ノートは破られていた。初めて一人でお昼を食べて、初めて一人で下校した。ミドリは泣きそうな顔で芽衣を見つめていたが、女の子たちに囲まれていたので何もできなかつたようだ。

家についた芽衣はイライラしていた。自分がこんなことになつているのだから、悲しむはずなのに、なぜか芽衣の心は怒りでいっぱいだつた。





なんでミドリは助けてくれないの。ずっと友達だつて約束したのに。勝手すぎるよ。第一、何で沙良がいなくなつたからつて次が芽衣になるのよ。もう嫌になつちやう。全部ミドリのせいなんだから。

何気なく窓の外を見た。沙良らしきあの人人が立つていた場所。誰かがいるような気がした。そんなことを思いながら眠りについた芽衣は、昔の夢をみた。沙良と楽しく遊んでいた時のことを。

いつも一緒にいた。着せ替えごつこもしたし、ままごともやつた。沙良は頭が良かつたので、良く芽衣の宿題を手伝つてくれたりしていた。それなのに、芽衣は、派手な女の子たちのグループにだんだん引かれていた。彼女らも、芽衣の外見を見て、まんざらでもない様子で芽衣をグループにいれてやつた。そう、芽衣だけ。

芽衣は沙良に對して申し訳ないという気持ちがあつたが、男子と仲良く話したり、おしゃれをしたりすることの楽しさを知り、だんだん沙良に對する気持ちが薄れていつた。そんな芽衣に對して、沙良は何も言わなかつた。文句も裏切られたことに對する怒りの言葉も。何もいわずに沙良は一人で生活するようになつた。そして、いじめの対象になつてからは、芽衣は沙良をかばうどころか、幼馴染である事実さえも消そうとしていた。あんなに一緒にいたはずなのに…。

新しい一日が始まつた。こんなに学校にいきたくないと思ったことは今まで一度もなかつた。だつて芽衣は笑顔の中心にいる人だつたのだから。こんなにいじめられるのが辛いことに今まで気づかなかつたなんて信じられない。母親が作つてくれたオムライスを渋々食べて、登校した。

四年一組の前。もう大勢の「おはよう、芽衣」が聞こえないことはわかつていたけど、芽衣は深呼吸をした。そしてこの時初めて、沙良の気持ちがわかつたような気がした。

いじめられる側はこんなに辛かつたんだ。芽衣は自分がやられていないか



賢治のまちから 高校生×童話大賞

らつて、沙良を放つて置いて、皆と当たり前のように一日を楽しんでたんだ。沙良はきつと大変だつたんだろうな。それでも、芽衣を恨まなかつたんだな。きつとあの人は沙良なんだろう。飛び降りてからも芽衣の心配をしてくれてたんだ。芽衣はあんなに酷いことを言つたのに…。

なんだかとても悲しくなつた芽衣は、無言で教室に入つた。またあの地獄の一日が始まるのかと思うと胸が痛かつた。きつと何かされる。それが怖くてたまらなかつた。

教室の空気が重かつた。自分の席についた芽衣はランドセルを置き、ミドリの方に視線をやつた。ミドリは昨日と同じように、はいていたズボンをぎゅっと握り締めていた。

ああ、ミドリはもう話しかけてくれないんだな。芽衣が沙良にしたみたいに。今まで沙良にしてきたことが頭に浮かんだ。そして、ひどく後悔していた。自分がやられてみないと気がつかないなんて…。

女の子たちが芽衣の机の周りを囲つた。

「なんか教室に誰か入つてきたんだけど。」

「この席つてさあ、空席だよね。」

「ランドセルが置いてあるよー。」

「嫌だあ。ごみだよ。捨てちやおーよ。」

楽しそうに女の子たちは話している。芽衣は泣きそうだつた。でも、泣いてもきつと誰も助けてはくれないだろう。誰も。

「もう、やめなよ。」

誰かが泣きながら叫んだ。教室の外まで響くくらい大きな声で女の子たちに。

「ねえ、ミドリあんた何様のつもり? 明日からどうなつてもいいの。」

リーダーの女の子が睨みつけながら怒鳴り返した。ミドリはかばつてくれたのだ。芽衣を助けてくれたのだった。



「あんたこそ、何様のつもりよ。沙良ちゃんのことだつて芽衣ちゃんのことだつて。いじめられるのがどんなに辛いことかわかっているの？だから沙良は飛び降りちゃつたんだよ。その責任は皆がとるべきだよ。皆で謝るべきなんだよ。それなのに、なんでまたいじめが始まるの？ 私たちがしないきやいけないのは、新しいいじめを始めることじゃなくて、沙良ちゃんにあやまることじゃないの？」

いつも上品で落ち着いているミドリからは考えられないような喋り方だつた。教室が静かになつた。男子も遊ぶのをやめ、芽衣の周りを囲つていた女の子たちも黙つて下を向いていた。芽衣は涙を流していた。

ミドリは大人だ。沙良の気持ちも芽衣の気持ちもちゃんと知つている。自分がやられたわけでもないのに、どれだけ辛いことのかちちゃんと気づいている。それなのに芽衣はミドリが助けてくれないことに怒つたり、沙良とあんなに仲が良かつたのに簡単に裏切つたり。酷いことばかりしてきた。それが酷いことだつてことも気づかなかつた。ああ、変わらなきやいけないのは芽衣の方なんだ。

目の前が真つ暗になつた。ミドリと女の子たちの口げんかがだんだん小さくなつっていくと同時にあの人の声がかすかに聞こえた。

「ほら。やつぱり気づけた。」

その声は、今まで一番優しい声だつた。

「いい加減にしなさいよ、芽衣。」

雷が落ちた。この声には聞き覚えがある。

「芽衣、あんた今何時だと思つているの。もう、夕方の五時よ。算数は終わつた？ まったく。こんな所で居眠りしないの。」

母親が芽衣の体を揺らしていた。その振動で芽衣は目が覚めた。

「え？ お母さん。今何時？ 学校は？」

「何バカなこと言つているの。学校は明日でしょ。それより、算数。終わ



賀治のまちから 高校生×童話大賞

つたのかつて聞いているの。」

芽衣にとつて母親は絶対だった。でも、今はそれどころではない。怒られるのも承知で芽衣は母親に言つた。

「ごめん。ちよつと出かけてくる。」

「ちよつと芽衣。もう。今日の夕飯はオムライスだからね、早く帰つてきなさいよ。」

あ…。オムライスなんだ。なんかいっぽい食べたような気がするんだけどな。まあ、いいや。

芽衣は走つた。走つて走つて、一目散に目的の場所へと駆けていった。

ベルを鳴らした。

沙良が扉を開けた。

「おつはよー沙良。ちよつと話があるの。」

芽衣は笑顔で手を振つた。